



|                  |                                                                                       |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 絵本『草原の若い姉妹』を読む：社会主義の「活きた少女モデル」の誕生秘話                                                   |
| Author(s)        | 宝力嘎                                                                                   |
| Citation         | 連環画研究, 8, 2-25                                                                        |
| Issue Date       | 2019-03-10                                                                            |
| DOI              | <a href="https://doi.org/10.14943/2115.98467">https://doi.org/10.14943/2115.98467</a> |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/98467">https://hdl.handle.net/2115/98467</a>     |
| Type             | departmental bulletin paper                                                           |
| File Information | renkanga_8_2-25.pdf                                                                   |



## 絵本『草原の幼い姉妹』を読む

——社会主義の「活きた少女モデル」の誕生秘話  
宝力嘎（ミンガド・ボラグ）

### はじめに

1974年に北京外文出版社から発行された、日本語版絵本『草原の幼い姉妹』（図1）について知っている日本人はどれぐらいいるのだろうか。同じくモンゴル草原を舞台にした絵本『スーホの白い馬』に比べると、ほとんど知られていないかもしれない。



（図1）

絵本『草原の幼い姉妹』は、1965年に上海美術電影製片廠が制作したアニメ『草原英雄小姐妹』<sup>1</sup>に基づいて編集されたものであるが<sup>2</sup>、物語は内モンゴル自治区（以下「内モンゴル」と略する）烏蘭察布盟達爾罕茂明安聯合旗新宝力格人民公社<sup>3</sup>の幼い姉妹の龍梅（1952年生まれ、当時11歳）と玉榮（1955年生まれ、当時9歳）が、1964年2月9日から10日にかけて零下37度の猛烈な吹雪の中で、人民公社の財産である羊の群れを守った実話に基づいている。この事件で、ひどい凍傷によりロンメイは左脚の親指を、ユイロンは右脚の膝から下の部分と左脚のくるぶしから下の部分を切断手術したが、二人は今も健在である。

近年、中国国内では、吹雪の草原で遭難していた姉妹の姉の方であるロンメイを最初にみつけたのは、当時、マスコミが報道した王福臣という鉄道員（鉄道のポイントを手動で切り替える係員）ではなく、「管制分子」<sup>4</sup>として下放されていたハスチョロ（1918-2005）というモンゴル人だったことや、ハスチョロの努力で幼い姉妹が救われたにも関わらず、事件後、ハスチョロは「羊どろぼう」という濡れ衣を着せられてしまったことが少しずつ報道されている。しかし、どうして幼い姉妹を救ったのがハスチョロではなく、鉄道員の王福臣になったのか、どうしてハスチョロは「羊どろぼう」という濡れ衣を着せられてしまったのか、は説明されていない。

1999年に内モンゴル人作家のベ・ジルムトが、幼い姉妹を救ったハスチョロ本人

のインタビューを踏まえて書いた小説『Ünen-u tegri』（正義の味方「蒼天」）が、モンゴル語の文学季刊誌『チョルモン』<sup>5</sup>（第4期・第79輯）に掲載され、物議を醸し、2002年に内モンゴル人民出版社から単行本として刊行された。これはおそらく『草原の幼い姉妹』の背後に隠された悲慘な物語を詳細に描いた初の資料であろう。中国では、政治的な理由から歴史の真相を描くことは小説を通してしかできない面があるので、著者は小説の形にしたと思われるが、この小説でも上に示した問題に触れていない。

最も重要なのは、遊牧社会において、吹雪の中、子どもが家畜を守ることはそれほど珍しいことではなく、冬のモンゴル草原ではよくあることだということである。そんな中で、どうして幼い姉妹の活躍が注目され、二人はいち早く時の人になったのか。そもそもどうして幼い子どもが吹雪の中で羊を放牧することになったのか。また、幼い姉妹の活躍を描いた絵本が日本語を含む多言語に訳されたのはなぜなのか。私が注目したいのはむしろこれらの問題である。

本稿では、当時の新聞記事やハスチョロの証言、当時の社会情勢などを踏まえながら上に示した疑問への答えを探る。

## 1 絵本『草原英雄小姐姐』の多言語版と北京外文出版社について

私が把握している限りでは、絵本『草原英雄小姐姐』は中国の少数民族の言語を除き、表1に示すように五つの言語で出版されている。出版社は同じく北京外文出版社であり、本のサイズ（縦18×横2cm）、キャラクターデザインや文章の位置、頁数は完全に日本語版『草原の幼い姉妹』に一致する。なお、絵本『草原の幼い姉妹』（外文出版社）と連環画『草原英雄小姐姐』（上海人民出版社）ならびにアニメ『草原英雄小姐姐』（上海美術電影製片廠）との差異については武田雅哉の研究に詳しい<sup>6</sup>。

表1 外文出版社から刊行された『草原の幼い姉妹』の多言語版一覧

| 言語      | タイトル                                  | 日本語直訳        | 出版年月   |
|---------|---------------------------------------|--------------|--------|
| 英語版     | Little Sisters of the Grassland       | 草原の小さな姉妹     | 1973,1 |
| フランス語版  | Deux soeurs héroïques de la steppe    | (大) 草原の勇敢な姉妹 | 1973,1 |
| 日本語版    | 草原の幼い姉妹                               |              | 1974   |
| ドイツ語版   | Zwei kleine Schwestern im Schneesturm | 雪原の二人の小さな姉妹  | 1974   |
| ウルドゥー語版 | چراگاہ کی بہادر ننھی بہنیں            | 牧場の勇敢な姉妹     | 1975   |

では、この外文出版社とはいったいどんな出版社であり、絵本『草原の若い姉妹』はどうして日本語を含む多言語で出版されたのだろうか。

外文出版社の公式ホームページによれば、外文出版社は 1949 年 11 月に中央人民新聞総理各国事務衙門が成立した直後から、「外文出版社」という名称で外国語関係の図書を出版していた。これは、1952 年 7 月 1 日に国際新聞局の廃局に伴って正式に成立した、対外的な書籍と定期刊行物の宣伝、外国語版書籍と定期刊行物の編集・翻訳及び出版に専従してきた外国語出版社であるという。主要な業務について「この半世紀あまり、43 種類の言語で 2 万余冊の図書を翻訳し、出版してきた。内容としては、中国の指導者の著作、中国の重要な文献、中国の社会、政治、経済、文化など、発行数は 4 億冊にのぼり、世界 100 以上の国や地域で発行されている」としている。また同ホームページには「中央一級出版社専門分野及びその指導に関する規定」が掲載されており、その中でこの出版社は、国家の対外宣伝に関する外国語の書物を統一的に出版する機構であると位置づけられている<sup>7</sup>。このことから、外文出版社は官製の対外宣伝出版社であることが分かる。なお、中国では出版社はすべて国営であり、大きく中央一級出版社、地方出版社と大学出版社の三種類に分類されている。中央一級出版社は、中央の各省<sup>8</sup>や委員会に直属する出版社である。地方出版社は各省・市・自治区の所属であり、大学出版社は大学の指導に属する学術的な出版社である。<sup>9</sup>

ここでもう一つ、外文出版社が、絵本『草原の若い姉妹』を多言語に出版することによって、対外的に何を宣伝しようとしたのかという疑問が出てくる。その答えを絵本『草原の若い姉妹』から探してみたい。絵本『草原の若い姉妹』にこのような場面がある（下線は引用者。以下同様）。

【p.3】 ロンメイとユイロンのお父さんは、いつもふたりに話してきかせます。

「毛主席は、わしたち全国の各民族人民の救いの星なのだよ。毛主席がわしたちに進む道を教えてくださるのだ。いつまでも、毛主席の教えどおりにしなければいけないよ」（図 2）

【p.7】 パトおじさんはいいました。「ロンメイとユイロンよ！ 一生懸命毛主席



（図 2）

席の本を勉強して、毛主席の教えどおりにするんだよ。そして、雷鋒おじさん<sup>10</sup>をよく見習って、りっぱな革命のあとつぎになっておくれ

【p.8】それからというもの、ふたりは、『人民に奉仕する』をはだ身はなさず持ちあるき、くりかえしくりかえし読みました。そして、雷鋒おじさんのように、革命のために、毛主席のために、一生をささげようと決心をかためました。

【p.19】空は青くはれわたっています。ふたりは、ウシがねてるような形の大きな石にこしかけて、『人民に奉仕する』を開いて毛主席の教えを学んだり、『雷鋒の物語』をよんで、雷鋒のようなりっぱな人になりたいと話しあいました。

【p.51】ロンメイの頭のなかに、ふと雷鋒おじさんのおもかげが浮かびました。すると、吹雪とたたかいぬく力がいっそうつよくわいてくるのでした。(図3)

【p.63】ユイロンは頭をもたげ、一生けんめい、はいながら前へすすみます。毛主席の教えを思い出し、自分自身を力づけながら.....。

【p.87】手当の結果、ふたりはやっと意識をとりもどしました。そして、ロンメイの言ったさいしょのことばは、「ヒツジはだいじょうぶだったかしら」ということでした。その場にいわせた人びとは、心をうたれて涙をうかべました。支部書記のパトさんは感動していいました。「ほんとうに毛主席のりっぱな子どもだ」

このように絵本『草原の幼い姉妹』の前半では毛沢東の肖像(図2)が登場し、幼い姉妹が周りの大人たちのすすめで毛主席の教えについて熱心に学ぶ場面が多く描かれている。そして、物語のクライマックスでは幼い姉妹が吹雪とたたかっている最中、ロンメイの頭に雷鋒おじさんのおもかげが浮かび(図3)、ユイロンは毛主席の教えを思い出す。幼い姉妹は偉大な指導者である毛主席の教えを受けて育ったがゆえに、猛烈な吹雪に負けて倒



(図3)

れるわけにはいかず、その結果、自分たちが生き残っただけではなく、人民公社の財産である羊を守ることができたというふうに描かれている<sup>11</sup>。これは、幼い姉妹が偉大な指導者である毛主席の教えをしっかり学んだ「毛主席のりっぱな子ども」だったからこそできたことであるというメッセージになる。つまり、北京外文出版社によっ

て多言語で刊行された絵本『草原の幼い姉妹』は、毛沢東思想を諸外国に向けて宣伝する目的で刊行されたことが推測できる。中国では、文化大革命中に推進された毛沢東思想の輸出が、日本を含むアジアだけではなく、ヨーロッパや中南米にも影響を与えたことが知られている。文化人類学者の楊海英によれば、1966 年秋から翌年の夏にかけて、中国では『毛沢東語録』を抜粋し、「世界革命の指針書」として「全世界を真っ赤に染めよう」と 24 カ国の言語に翻訳し、117 カ国に配布され、その発行部数は 50 億冊に達した。当時の世界人口は 30 億あまりだったので、平均して 1 人 1.5 冊を所持したことになる。<sup>12</sup>

時を同じくして中国国内でも、ロンメイとユイロンの活躍を題材にした絵本（カラー版も含む）は大量に刊行されているが、キャラクターデザインや色合いには大きな違いがないものの、そのほとんどが L または 2L の写真サイズのものである。例えば、1970 年 10 月 25 日に上海紅小兵報社によって発行された雑誌『紅小兵』（縦 12.8×横 17.8cm、全 12 頁）の第 20 期・第 67 輯に「草原英雄小姐姐」が掲載されており、キャラクターデザインなどは完全にアニメ「草原英雄小姐姐」に従っているが、2 頁計 18 コマのダイジェスト版である。それに対して絵本『草原の幼い姉妹』は、縦 18×横 2cm、全 89 頁のカラー版の絵本であり、絵本にしては枚数が多いという印象を受ける。このことから、絵本『草原の幼い姉妹』は対外宣伝用に発行されたゆえにコストもかかっていたといえよう。

また、絵本のテキストに注目すれば、日本語版『草原の幼い姉妹』の本編（全 89 コマ）では、「毛主席」ないし「毛沢東思想」は計 10 コマ（計 13 回）に、「雷鋒」は計 5 コマ（計 6 回）に登場する。「共産党」は全く登場しない。それに対して連環画版『草原英雄小姐姐』（上海人民出版社、1970）の本編（全 99 コマ）では、「毛主席」ないし「毛沢東思想」は計 24 コマ（計 27 回）に、「雷鋒」は計 9 コマ（計 15 回）に登場するが、「共産党」は計 3 コマ（計 3 回）にしか登場しない（イラストの中のテキストは除く）。また、イラストに注目すれば、日本語版『草原の幼い姉妹』では毛沢東の肖像が 1 コマにのみ登場するのに対して連環画版『草原英雄小姐姐』では計 4 コマに登場する。これはつまり、当時の中国では毛沢東に対する個人崇拝が圧倒的に強かったことを意味する。

## 2 幼い姉妹は誰に救われたのか

1998 年 12 月中旬のことである。私は大叔父ソニンバヤル（1924 年生まれ）の定期

健診のために、内モンゴルの中心都市フフホト市にある内モンゴル病院に行った。病院の廊下で、大叔父が少し痩せ型で髪の毛を綺麗に整えた 80 歳代の男性と出くわした。二人は肩をたたき合いながら挨拶すると、廊下のベンチに腰をかけ、しばらく話に花を咲かせた。なぜか二人の会話には日本語が混じっていた。

それから一週間後、その男性が大叔父の家に来た。その時、彼が『草原の幼い姉妹』でおなじみのロンメイとユイロンを救ったハスチョロであることを初めて知って、驚いた。というのも、小学生の頃、週末に役場の講堂で革命映画がよく上映されていて、そこで私たち子どもはアニメ『草原英雄小姐妹』を繰り返しみせられていたからである。講堂は大人たちのすすり泣きで満たされ、思わずもらい泣きをする子どももいた。やがて私たちは幼い姉妹の台詞を完全に覚えてしまい、主人公が言う前にその台詞を言ってみなで笑うようになった。また、アニメ『草原英雄小姐妹』の台詞やキャラクターのしぐさが京劇特有の舞踊的演出の影響を受けていて、子どもたちはそれを真似して遊んでいた。その時、担任の先生はよくアニメ『草原英雄小姐妹』の主題歌を口ずさんでいて、「ロンメイとユイロンを救ったのは漢人の王福臣です。だから、漢人がすべて悪い人というわけではありません」と私たちに話していた。当時、草原のモンゴル人には、漢人を嫌いな者が多く、そのため先生は私たちにそう説明したのであろう。

大叔父のソニンバヤルは長年、内モンゴルの日刊新聞である『内蒙古日報』や内モンゴルのテレビ局である「内蒙古廣播電視台」で働いていて、ハスチョロは同じ系列の内モンゴル人民出版社で働いていたので、二人は昔からの知人だった。それにハスチョロは満洲陸軍士官学校出身であり、大叔父は日本の傀儡とも呼ばれている徳王ことデムチョクドンロブ（1902-1966）が日本の支援で創設した四年制旧制中学校「張北青年学院」と張家口にあった三年制の旧制高等学校「内蒙古高等学院」の卒業生である。前に触れたように、二人の会話に日本語が混ざっていたのはそのためであった。

二人の話は盛り上がり、話題が『草原の幼い姉妹』に移った。私はハスチョロが「胡耀邦のおかげで白黒がはっきりした」と話した時に、彼の目が潤んでいたことを、鮮明に覚えている。歴史の話が大好きな私は、二人の会話に耳を傾けながら記録を取ったが、経験不足から正確な日時を書き忘れてしまった。本稿では、その時のハスチョロ本人の証言を補足資料として用いるが、本稿の中核となる検証部分では使用しないこととする（以下「ハスチョロによれば……」という文章は当時の記録に従っている）。

では、幼い姉妹が救われた経緯が、当時の新聞にどのように書かれ、絵本『草原の

幼い姉妹』でどのように描写されたのか、そしてそれがハスチョロ本人の証言とどう異なるのか、みてみたい。

## 2-1 新聞記事

1964年3月14日の『内モンゴル日報』（モンゴル語版）の第一面に「草原英雄小姐妹」という記事が掲載された。

10日の午後、吹雪は激しくなり、天と地が一つになったようにみえた。511号の客車は駅に入る時間が近づいていた。共産党員・鉄道員の王福臣は客車が駅に入ることを許可する合図を出した後で、ふとロンメイがふらふらしながら吹雪の中を歩いていて、列車が走ってくる線路を横断しようとしているのがみえた。彼は慌てて走っていき、ロンメイの脇にうしろから手を差し入れて彼女を線路からおろした。そのとたん、列車は二人の横を通り過ぎた。彼はロンメイを駅舎に連れていくと、彼女の手や足が青く変色し、氷のように冷たくなっていることに気付いた。彼は暖かい手で彼女の冷たく凍った両手を握った……。

この新聞記事によれば、ロンメイはほぼ意識がなく、吹雪の草原をふらふらしながら線路を渡ろうとしていた時、共産党員である鉄道員の王福臣によって発見され、救われたことになる。換言すれば、共産党員の王福臣は猛烈な吹雪の草原をさまよう幼いロンメイを救っただけではなく、列車にはねられそうなロンメイをも救ったのである。また、新聞記事にあるように、王福臣がロンメイを抱えて線路からおろしたことや、暖かい手でロンメイの冷たく凍った両手を握ったことは、共産党員の優しさや暖かい心を表現している。

## 2-2 絵本『草原の幼い姉妹』

一方、絵本『草原の幼い姉妹』（外文出版社）では、ロンメイとユイロンが救われた様子はどのように描写されているのか、みてみよう。

【p.81】夜があけました。ロンメイは妹を背負い、ヒツジについて、ある駅の近くにたどりつきました。このとき、支部書記<sup>13</sup>のパトさんたちは駅の方へ探しにきたのです。

【p.82】 ロンメイの耳に遠くの方からさけび声がきこえました。 なんとききなれた声でしょう。お父さんの声がします。パトおじさんの声もします。ロンメイはたちどまりました。

【p.83】 このとき、駅にいた労働者のおじさんたちも、とつぜん、遠くの方から、子どもがヒツジの群れをつれてやってくるのを発見しました。子どもは凍りついた雪のうえをふらふらしながらあるいています。労働者のおじさんたちは急いで線路をこえて、子どもたちの方へとんでいきました。

【p.84】 ロンメイがふり返ってみると、なんとお父さんやパトおじさんや村の人たちがやってくるではありませんか。

この内容をまとめると、ロンメイは妹を背負って駅の近くまで辿りついたところ、駅にいた労働者たちが二人を発見して救出に向かう時、お父さんや支部書記のパトおじさんや村の人たちもやってきたことになる。つまり、幼い姉妹は偉大な指導者である毛主席の教えを受けた「毛主席のりっぱな子ども」だったので、猛烈な吹雪に負けず、自ら駅まで辿りついたところ、党や人民や労働者によって救われたことになる。これは当時の政府の見解そのものであった。

### 2-3 ハスチョロの証言

では本当は、ロンメイとユイロンはどのようにして救われたのか。吹雪の草原で遭難していた姉のロンメイを最初にみつけたハスチョロは、幼い姉妹が救われた経緯についてこのように振り返っている。

ハスチョロは 1964 年 2 月 9 日、三日前に訪れた同級生のテムルゴルトを最寄り駅に送るついでに、旧正月の買い物のため、バヤンオボ駅に向かった。モンゴルでは旧正月前に散髪する習慣があるので、彼は息子のナランマンドラを床屋に連れていった。ところが、駅に着いた時、すでに列車の出発する時間が迫っていた。同級生のテムルゴルトはタルハン・モーミンガン連合旗の連絡所に荷物を預けており、その荷物を取りに行く時間がなかったため、仕方なく一泊することになった。三人はそのまま床屋に入ったが、人でいっぱい、夕方まで空きそうもなかったため、ハスチョロ親子も一泊することになった。翌朝、ハスチョロが起きた時、天気がひどく荒れていた。ハスチョロは家族や羊のことが心配になって、同級生を駅まで送

るのをやめ、息子と二人で帰路についた。

しばらく歩くと、二人は線路脇の排水溝に羊の群れをみつけた。もしかして自分たちの放牧している羊が、吹雪のせいで迷い込んだのかもしれないと思い、走って  
いってみると違っていた。だが、このまま放っておくわけにもいかず、二人は羊を  
近くに住んでいる知人のところに連れていくことにした。すると、山羊と羊が一匹  
ずつ死んでいるのがみえた。当時、家畜はすべて人民公社の財産であり、生産者は無断で家畜の乳を飲むことすら許されなかった。そのままおいておくと、人民公社の財産（死んだ山羊と羊）が野良犬などに食われてしまう。そこでハスチョロは、羊の群れを息子に任せて、山羊と羊の死体を近くの駅舎で保管してもらうことにした。ハスチョロは山羊と羊の死体を背負って駅舎に辿りついた。ところが、駅舎にいた王福臣は家畜の死体を保管することをひたすら拒んだ。ハスチョロが優しく頼んでも厳しく怒鳴っても効き目がなく、仕方なく夕方までに取りに来ると約束してその場を離れた。

ハスチョロが息子のところに急いで戻ると、息子がもう一人の女の子と一緒にいるのがみえた。11、2歳ぐらいの女の子で、凍傷で顔が腫れ、ブーツが雪で固まっ  
ていたのにも関わらず、暑苦しい様子で上着のボタンを全部外していた（人が寒い環境に長時間おかれると起きる現象である）。女の子はハスチョロの質問に対して口を動かしたが、言葉が出なかった。女の子が幻覚を起こしていることを察知したハスチョロは、慌てて女の子を連れて駅舎に向かった。

この時、ハスチョロは女の子のことが心配で、息子ナランマンドラのことを完全に忘れていた。ハスチョロは女の子を連れて線路を横断し、しばらく歩いてからふと息子を置き去りにしたことを思い出した。みると、8歳の息子が線路を渡ろうとしており、そこに列車が突進して来るのがみえた。吹雪で視界が悪く、ナランマンドラは列車に気付いていない様子だった。ハスチョロは息子に向かって「止まれ！止まれ！列車がきている」と叫んだ。父親の叫び声に驚いたナランマンドラが立ち止まった瞬間、列車が彼の横をすれすれに通り過ぎた。

女の子の名前はロンメイといい、前日の朝、妹と一緒に羊の放牧にでかけたこと、二人は吹雪の中で昼夜にわたって、羊の群れを追って走ってきたこと、妹とはぐれたことなどを話してくれた。ハスチョロは駅舎にいた王福臣に助けを求めたが、彼は「私は鉄道関係者である。牧畜関係のことは牧畜関係の人を探してください」と協力を拒んだ。ちょうどその時、四、五人、鉄道関係の労働者が入ってきた。ハス

チョロは彼らの協力で、女の子の凍りついた部分を雪で洗った（凍傷などに用いる民間処置方法である）。それから労働者たちに、山にいる女の子の妹を探すように協力を頼み、自分は政府関係者に知らせに走った。

ハスチョロはあちらこちらに電話をし、事情を説明したが、大雪だったこともあり、地方の役所特有の、のんびりした対応の中で、時間だけが過ぎていった。ハスチョロは怒鳴ったり走ったりしながら、やっとのことで政府の責任者をみつけた。人を集めて、山に女の子を探しにいかうとしていたその時、先ほどの労働者たちが意識不明の妹をみつけてきた。こうして幼い姉妹は救われたのだった。<sup>14</sup>

ハスチョロの証言からは、自分の行動に名誉を求める気持ちなどは見当たらない。凍死する寸前のロンメイをみつけた時、彼の頭には「いち早くこの子を救わなければならない」という気持ちしかなく、「管制分子」であるにも関わらず、政府関係者に向けて怒鳴ったりしながら奮闘したことが分かる。

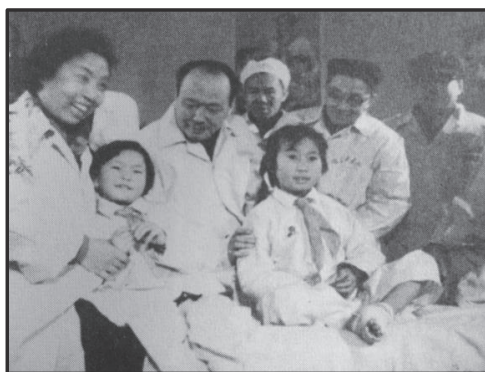
### 3 どうして幼い姉妹の活躍が世間に注目されたのか

前にも述べたように、吹雪の中で子どもが家畜を守るとは、遊牧社会ではそれほど珍しいことではなく、冬のモンゴル草原ではよくあることである。だが、この幼い姉妹の活躍は世間に注目され、二人はまたたくまに時の人となった。それはどうしてなのか。

ロンメイとユイロンの活躍にいち早く注目したのは、当時の内モンゴルの最高指導者だったウランフーこと雲沢<sup>ユンゼ</sup>だった。ウランフーは1964年3月12日の『人民日報』に掲載された「暴風雪中一昼夜——記英勇保護公社羊群的蒙古族小英雄龍梅和玉栄」という記事をみて、その翌日に夫人の雲麗文らと一緒に内モンゴル人民病院に駆けつけ、凍傷を負った幼い姉妹を見舞った（図4）。そして、1964年3月14日の『内モンゴル日報』の中国語版とモンゴル語版の両方には、ウランフーによる題字「ロンメイとユイロンの姉妹は、牧畜地域の人民が毛沢東思想教育のもとで成長してきた革命の継承者である。我が自治区の各民族の青少年は積極的に彼女たちの模範行為や崇高なる品格に学ぶべきである」が掲載された。同月18日には、内モンゴル共産青年団が「全自治区各民族青少年がロンメイとユイロンの模範行為や崇高なる品格に学ぶ運動に関する規定」を定めた。その中では、「青少年を動員し、3月14日に『内モンゴル日報』に掲載されたウランフー主席の手記や、記事『草原英雄小姐妹』や本

規定を含む（ロンメイとユイロンに関する）すべての新聞記事、ラジオ放送から学ぶと同時に、集会を開いて、自分たちの意思を表明したり、演劇を用いて積極的に宣伝活動を行ったりしなければならない」と学び方までが詳しく指示された。これを受けて、3月27日からは、フフホト市内にある劇場で、「草原の英雄姉妹」という京劇が披露され、劇場は毎晩のように人であふれかえり、以降、各地で幼い姉妹に学ぶイベントが催されていった。

ところで、前に述べた、ウランフーが夫人の雲麗文らと一緒に凍傷を負った幼い姉妹を見舞っている写真（図4）をみれば、幼い姉妹は凍傷で入院しているのにも関わらず中国少年先鋒隊のシンボルである赤いネッカチーフ「紅領巾」を締め、一方ウランフーらは白衣を身につけている。おそらく室内に複数のカメラがあったと思われるが、雲麗文、ロンメイとユイロンの視線がそれぞれ違って、雲麗文はカメラに向かって満面の笑顔を見せている。これはつまり、宣伝



（図4）楊海英『中国とモンゴルのはざままで——ウランフーの実らなかった民族自決の夢』より

用に撮られた一枚であることが分かる。また、ウランフーらは幼い姉妹を見舞った後、お茶を飲みながら休憩している様子も撮られている（図5）。ここからもウランフーが幼い姉妹を見舞ったのは公式行事だったことが窺われる。

では、ウランフーが幼い姉妹の活躍に注目した本当の狙いは何だったのか。楊海英はウランフーの生涯を、時代ごとに「求道（1906-1928）、空白（1928-1945）、自決（1945-1949）、自治（1949-1963）、抵抗（1964-1966）、破滅（1966-1976）、余燼（1977-1988）」<sup>15</sup>と分けている。つまり、ロンメイとユイロンの事件が発生した1964年は、ウランフーの生涯にとって、ちょうど「抵抗（1964-1966）」に当たる。

するともう一つ、ウランフーは何に抵抗していたのか、という疑問が生じる。その答えは内モンゴルの近代史に深く関係しているので、ここで内モンゴルの近代史について簡単に触れながら、その答えを探りたい。



(図5) 楊海英『墓標なき草原』上(岩波書店、2009年)より

1945年8月9日にソ連・モンゴル人民共和国の連合軍が内モンゴルに侵攻し、10日にモンゴル人民共和国が対日宣戦布告をした。連合軍の攻撃を受けて、日本は内モンゴル草原から撤退し、日本の傀儡だと言われていた蒙古自治邦と満洲国も自然に瓦解した。この機会に蒙古自治邦や日本に留学の経験がある若い知識層が中心になって作ったモンゴル青年党のメンバーが、内モンゴルをモンゴル人民共和国の傘下に入れることを試みたが、同年2月にアメリカ、イギリス、ソ連による「ヤルタ会談」で交わされた「外モンゴル(モンゴル人民共和国)の現状が維持されること」という密約が障害となり、モンゴル青年党の努力が水の泡になった。内モンゴルとモンゴル人民共和国が統一されると、ソ連領内にあるブリヤート・モンゴル人やカルムイク・モンゴル人も、統一されたモンゴルに加わるように動く可能性がある。これがソ連にとって好ましいことではなかった。一方、中国国民党からしても、自分たちの領土だと主張してきた広大な土地を失うことは、許し難いことであった。ゆえに、ヤルタ会談に端を発して1945年8月に締結された「中ソ友好同盟条約」により、国民党政権は外蒙古の独立を認める代わりに、ソ連は内モンゴルや東トルキスタンなど、中国国内の独立問題に干渉しないとする密約が交わされた。

そこで、徳王ことデムチョクドンロブをはじめとする内モンゴル中部のモンゴル人は、1945年9月にシリングル盟の西ソニド旗で人民代表大会を開催し、内モンゴル人民共和国臨時政府を旗揚げして内モンゴルの独立を宣言して臨時憲法を発表した。

この頃、中国共産党の内モンゴルにおける活動も活発化しつつあり、ウラーンフーの活動が目立つようになる。ウラーンフーはコミンテルンの指示で1925年にソ連に留学し、帰国後、中国共産党の聖地である延安でさらに修行した正真正銘の共産主義者である。このウラーンフーをはじめとする中国共産党側に傾いたモンゴル人勢力が、

産声をあげたばかりの内モンゴル人民共和国臨時政府を乗っ取った。

一方、満洲国に編入されていた内モンゴル東部では、1946年1月に東モンゴル人民自治政府が誕生したが、内モンゴルの東部と西部を統一させるという試みの中で、またもウランフーが指導する内モンゴル自治運動連合会に合併吸収された。また、満洲国興安北省になっていたフルンボイル地域のモンゴル人は、満洲国興安北省の省長だったエルヘムバトの指導で、1945年10月にフルンボイル自治省政府を成立させ、翌年3月に「フルンボイル地方自治政府」と改名し、モンゴル人民共和国の傘下に入ったことを宣言するが、これもまたウランフーをはじめとする中国共産党側の勢力に乗っ取られた。その結果として1947年5月1日、当時の内モンゴルの政治経済の中心地であった王爺廟（現「オランホト市」）で内蒙古自治政府が樹立したが、新中国の建国に伴って1949年12月に内蒙古自治区人民政府に変わったのである。

ウランフーは、自ら率先して、他のモンゴル人の勢力を次々と乗っ取ったのだったが、それはソ連留学の経験のある彼が、連邦制を認めるソ連型の民族自決に魅力を感じていたからである。加えて毛沢東をはじめとする当時の中国の指導者たちは、少数民族の分離独立を承認する姿勢を示していて、毛沢東が1935年に発表した「中華ソビエト政府の対内モンゴル人民宣言書」（通称「三五宣言」）においても、「内モンゴルのモンゴル人には自分たちの政府を創り、他の民族と連邦を結成する権利がある」<sup>16</sup>と明記されていた。

しかし、新中国の建国後、毛沢東は約束を忘れ、区域自治しか認めなかった。それに対してウランフーは様々な形で抵抗し始めたのである。ロンメイとユイロンの事件が発生する約一年前の1963年3月5日に毛沢東は全国民に向けて「雷鋒同志に学ぼう」という運動を起こしていた。それに対抗するかのように、ウランフーは「草原の若い姉妹に学ぼう」という運動を起こしたのである。楊海英はこのように指摘している。

「特色のある社会主義の民族自治地域」にはモデルの構築が必要だ。ウランフーは中国全土で知らぬ人がいないほどの「社会主義のモデル」を二つ創造した。一つは「草原の英雄小姉妹」で、もう一つは「牧畜地域の大寨ウーシンジョ」である。<sup>17</sup>

大寨とは、人工の棚田を作り、農作を増やしたとされた山西省の農村のことであり、1964年に毛沢東によって中国全国で「大寨に学べ」という運動が勃興した。その頃、

オルドス高原のウーシンジョ人民公社が、女性リーダーのボロルダイに率いられて湿地帯に生えている毒草を排除し、そこに家畜が食べる牧草や樹木を植えることに成功したニュースがウラーンフーの耳に入った。それを知ったウラーンフーは1965年11月25日に「ウーシンジョ人民の天地創造の精神に学ぼう」という題字を書き、それによって「牧区大寨」の名が全国に知られるようになった。ウラーンフーは、特色のある社会主義の民族自治地域には、その民族自治地域特有のモデルが必要であると考えていたようであり、ウラーンフーの考えの背後には、内モンゴルは漢族省や市とは違うという意識があったに違いない。

また、文化人類学者でケンブリッジ大学教授のオルディン・エルデン・ボラグは次のように指摘している。

毛沢東ら中国人共産主義者たちが造った「社会主義の模範」は、人民解放軍兵士の雷鋒のような「死んだ烈士」だった。これに対してモンゴル人のウラーンフーが鑄造した模範はモンゴル人の少女で、かつ民族を超えて中国人と団結できるストーリーを織りなす。(中略) ウラーンフーは「活きた女のモデル」を愛したのに対して、毛沢東は「死んだ男の模範」を好んだというジェンダー的な構図も成立する。<sup>18</sup>

確かに私の学生時代を振り返ってみれば、教科書に掲載されたり、映画、小説や絵本の主人公になったりしていた革命物語に登場する英雄、例えば、雷鋒、張思徳<sup>19</sup>、董存瑞<sup>20</sup>、黄継光<sup>21</sup>らは、全員が死をもって英雄になった男たちである。一方、ウラーンフーによって創造された「草原の英雄小姉妹」や、前に述べた「牧畜地域の大寨ウーシンジョ」のリーダーのボロルダイは生きている女性だった。ウラーンフーからすれば、幼い姉妹は、死んでもおかしくない状況下で生き残ったからこそ英雄なのである。単純な理屈である。ゆえに、民族区域の主席であるウラーンフーが造った活きたモデル「草原の幼い姉妹」は、国家主席である毛沢東が造った美談を追いついて抜く形で瞬く間に全国に広まり、人々に感動と勇気を与え、ついに世界に向かって羽ばたいた。

実は、ウラーンフーの一連の行動にもう一つの狙いがあった。それはこの事件が発生した地域と深く関係する。この事件が発生したのは、ダルハン・モーミンガン連合旗であるが、その政治経済の中心地であるバトハガラガこと百霊廟<sup>ペーリン・スム</sup>は、1933年7月26日に徳王が日本の協力で第一回内モンゴル自治会議（通称「百霊廟会議」）を開催させた、内モンゴル自治運動の聖地であった。それに、この地域は歴史的にモンゴ

ル人と漢人が土地を巡って争ってきた地域であり、中国では関東軍による陰謀であるとされている「綏遠事件」<sup>22</sup>の舞台でもあった。そして、この事件が発生したダルハン・モーミンガン連合旗は、修正主義国家と呼ばれていたモンゴル人民共和国（現モンゴル国）に隣接する地域であり、当時、相次ぐ政治運動の中で隣接するモンゴル人民共和国へ逃げるモンゴル人が多かった。このような「危険な地域」に社会主義の生きたモデルが生まれたことは、ほかでもなく、自分の正しい指導にあるのだと、ウラーンフーは党中央に向けてアピールするために幼い姉妹の活躍に注目したのである。

しかし、ウラーンフーの党中央に対する抵抗や自己アピールは無念な結果に終わり、1966年5月21日から7月25日にかけて北京の前門飯店で開かれた会議でウラーンフーは失脚し、そこから11年間も表舞台に出ることが許されなかった。一方、ウラーンフーによって創造された社会主義のモデル『草原の幼い姉妹』は、内外的に毛沢東思想を宣伝する道具になってしまった。

#### 4 どうして幼い姉妹を救ったのはハスチョロではなく、王福臣になったのか

1964年3月15日の『内モンゴル日報』（モンゴル語版）の第一面に「フフホト鉄道局党支部が草原の幼い姉妹を救った鉄道員を表彰した」という記事が掲載された。そこに写っていた鉄道関係者の8人の中に、あの王福臣が写っていた。彼らに与えられたのは「民族団結の輝かしい模範人物」という表彰であり、フフホト鉄道局党支部が全職員に向けて「モンゴル人の子どもを救った労働者たちの階級や民族を超えた愛や、他人に奉仕する志を生きがいにした共産主義の思想に学ぼう」と呼びかけた。

ハスチョロによれば、この時、幼いロンメイを最初にみつけたのはハスチョロというモンゴル人であり、ハスチョロの努力によって二人が救われたのだ、という話は、地元の人々の間で、すでに話題になっていた。しかし、当時、牧畜民より工人（工場肉体労働者）の身分が上で、より「潔白」とであるとされていたこともあり、取材班は漢人労働者の王福臣のところに集まったという。

では、なぜ幼い姉妹を救ったのがハスチョロではなく、漢人労働者の王福臣になったのか。この点について以下に示す3点から詳しくみてみたい。

第1に、革命模範劇に代表される革命故事には、正義の味方と対立する悪役が必要不可欠だった。その悪役として選ばれたのが、ハスチョロだったという訳である。

すでに述べたように、1964年3月14日の『内モンゴル日報』に掲載されたウラーンフーによる題字を受けて、内モンゴル共産青年団が「全自治区各民族青少年がロン

メイとユイロンの模範行為や崇高なる品格に学ぶ運動に関する規定」を定め、各地で『草原英雄小姐妹』に学ぶ行事が催された。ちょうどこの頃、毛沢東の夫人である江青らが京劇の改革をすすめて、「革命模範劇」に取り組んでいたもので、各地で幼い姉妹の活躍を題材にした演劇が披露されはじめた。

ところが、演劇の中で幼い姉妹が猛烈な吹雪とたたかっただけでは、人々の心を動かすことができないし、観衆も飽きてしまう。演劇を盛り上げるためにも、正義の味方であるロンメイとユイロンと対立する悪役が必要であった。また、当時は階級闘争の内容がある劇が賞賛されていた時代でもあり、関係者は王福臣の、記者のインタビューに対する発言をヒントにハスチョロを人民公社の羊を盗んだ「羊どろぼう」として登場させた。<sup>23</sup>それは次第にエスカレートし、ハスチョロは吹雪の草原で遭難していたロンメイをみつけるも救おうとせず、羊の死体だけ持ち逃げした悪人となり、さらにハスチョロは個人の羊を一匹も持っていなかったのにも関わらず、「反動的牧主」にまでなっていた。小説『Ünen-u tegri』によれば、当時、上演されていた劇「草原英雄小姐妹」の中に登場する羊どろぼうの服装は、事件当日、ハスチョロが着ていた服と完全に同じく、不気味な音楽の中で羊どろぼうが長い刀を持って登場し、羊を盗もうとする。幼い姉妹が羊を守って全力でどろぼうに立ち向かうが、やがて気を失う。その隙にどろぼうが羊を引きずって逃げるが、鉄道員が登場して羊どろぼうを倒すというストーリーだったという。<sup>24</sup>

第2に、ハスチョロの経歴に問題があった。ハスチョロは日本の傀儡国家である満洲にあった陸軍士官学校出身だった。実は、この経歴が原因で、ハスチョロは1957年に毛沢東が推進した「反右派闘争」に巻き込まれ、1953年から働いていた勤務先の内モンゴル人民出版社を追放されていた。内モンゴル人民出版社がハスチョロを追放する理由には、「いつも日本の俳句を詠み、日本の歌を歌っている」<sup>25</sup>という項目があった。

反右派闘争は、中国共産党の歴史的な政治運動の一つである。1956年4月25日、毛沢東は中国共産党中央政治局拡大会議において、党や指導部に対する批判を歓迎するという主旨の「百花斉放、百家争鳴」の方針を打ち出した。それを受けて多くの知識人たちは、党や指導部に対して様々な意見や改善策を発表した。1957年5月15日、毛沢東は「状況は変わりつつある」とし、党や指導部に対して陳述書を提出した知識人たちを「反動的な右派」と決め付けたことにより、彼らは様々な弾圧を受ける結果となった。ハスチョロによれば、彼も共産党に入党する志願書の中で共産党に対する

自分の意見や改善策を書いていたので、「反動的な右派」になったのだという。その処分を不服としたハスチョロは、長年にわたって訴えを続けたが、認められず、一家は1962年7月に「管制分子」として、絵本『草原の幼い姉妹』の物語の舞台である内モンゴルオランチャブ盟ダルハン・モーミンガン連合旗シンボラグ人民公社に下放された。

つまり、このように個人の経歴に問題があり、「反動的な右派」として働いていた出版社から追放され、「管制分子」として人民の監視下におかれている人物では、毛主席の教えのもとで成長してきた中国の未来である幼い姉妹を救う英雄には相応しくなかったのである。当時、政府関係者も幼い姉妹を救ったのはハスチョロであることを知っていたが、「幼い姉妹は党、人民、労働者によって救われた」という見解を示した。これをいち早く察知したのが、あの王福臣だった。彼は記者団に対して「ハスチョロはロンメイを駅舎に連れてきてからすぐ帰ろうとした。私が繰り返し説得したので彼は仕方なく関係者を探しに行った」と話した。王福臣はさらにハスチョロは死にかけていたロンメイを無視し、死んだ羊を背負って逃げる途中、鉄道関係の労働者たちと遭遇した。労働者たちが「この羊をどこに持っていくつもりですか」と聞くと、ハスチョロはぐずぐずしながら「あなたたちが欲しかったらあげます」と答えた。労働者たちは「取った場所に戻してこい」と叱り、ハスチョロを連れて羊の群れの近くに行ったところ、遭難していたロンメイをみつけたとまで証言した<sup>26</sup>。

第3に、王福臣のような漢人を「民族団結の輝かしい模範人物」として活躍させる必要があった。この時期、事件が発生した地域の近くに包頭鉄鋼コンビナートが作られ、それに伴い鉄道が敷かれ、大量の漢人労働者が移住してきていた。鉄道員の王福臣もその一人である。前に述べたハスチョロが友人を送りに行ったバヤンオボ駅付近は鉅山地帯であり、その鉄道も鉄鋼コンビナートのために敷かれたものである。

すでに述べたように、この地域は元々、外部から移住してきた漢人と先住民のモンゴル人が激しく対立していた上、そこに大量の漢人が移住してきたことに対して地元のモンゴル人の不満が頂点に達していた。だから、王福臣のような漢人を「民族団結の輝かしい模範人物」として登場させ、地元のモンゴル人の怒りを落ち着かせる必要があったのである。漢人側から言わせれば「文明人の漢人」が「野蛮人のモンゴル人」を救う図式は、漢族社会にあった文化的優越感を満足させるものであり、喜ばしいことであった。しかし、「民族団結の輝かしい模範人物」になった王福臣は、計4回にわたってハスチョロの家を訪れ、幼い姉妹を救ったのは間違いなく自分であると嘘の

証言をしてくれるように要求し、自ら民族団結に傷を付けている<sup>27</sup>。

また、ウラーンフー自身も包頭鉄鋼コンビナートの建設に伴い、移住してきた漢人の比率が先住民のモンゴル人より高くなることで、民族差別やトラブルが生じかねないと考えていた。ちょうどこの頃、遼寧省で大規模な干ばつが起きたので、ウラーンフーはその対策という名目で 1960 年に遼寧省の一部のモンゴル人をこの地域に移住させる政策を打ち出した。これもまたウラーンフーの党中央に対する抵抗である。ロンメイとユイロンの家族も、1960 年に遼寧省から事件が発生した地域に移り住んだ一家だった。ゆえに、幼い姉妹の活躍はウラーンフーにとって自ら打ち出した政策の正当性をアピールするいい材料にもなったと言える。

こうした様々な政治的思惑の中で幼い姉妹を救ったのは漢人鉄道員の王福臣になり、ハスチョロは「悪人」として吊るし上げられた。これはハスチョロが満洲陸軍士官学校出身であるがゆえに起きた悲劇でもある。

## 5 どうして幼い子どもが吹雪の中で羊を放牧することになったのか

幼い姉妹が吹雪の中で羊を放牧することになった経緯について、絵本『草原の幼い姉妹』は次のように描いている。

**【p.9】** 1964 年 2 月のある朝、スグルさんが井戸ばたで水をくんでいました。そこへ突然、躍進生産隊の青年クエリさんが、あわただしくやってきました。「生産隊のヒツジが難産です。獣医さんが留守なので、すぐに手伝いにきてください。」

**【p.10】** スグルさんは、すぐにその頼みをひきうけて柱につないだ馬のつなをときながら、ロンメイとユイロンにいいつけました。「とうさんは急用で躍進生産隊にいつてくる。ふたりで、さきにヒツジをチージータンの草地へつれていきなさい。」  
用がすんだらわしもすぐにいくからな。

つまり、ロンメイとユイロンの父親は躍進生産隊の羊の出産を手伝いにいくことになり、仕方なく幼い姉妹に羊の放牧をまかせたという。ところで、モンゴル放牧文化の中に生まれ育った者であれば、誰でも分かることだが、家畜の出産はそれほど難しいことではない。私も放牧社会で生まれ育った者であり、小さい時から数えきれないほど家畜の出産に立ち会ってきた。家畜の難産はまれであるが、母親が痩せ細って体力のない時や、胎児が何らかの原因により母体内で死んでしまった時には、厄介な事

態となる。その時、手術をするのが一番だが、草原では手術をする環境が整っていないことが多い。だから、一番手っ取り早いのは、手で胎児を引っ張り出す方法である。長くて 30 分もあれば済むことであり、それほど難しいことではない。この仕事には手が大きい男より、手が細い女性や子どもが向いている。

何が言いたいのかというと、そもそも寒い冬、しかも吹雪がくる恐れがある季節に幼い子どもに羊の放牧をまかせたことが問題なのである。逆に、幼い姉妹が吹雪の中で人民公社の羊を放牧したことからは、当時の社会的・政治的情勢を読み解くことができる。この点について、以下に示す 3 点からみてみたい。

第 1 に、漢人指導部による伝統的な放牧文化の軽視が、問題の根底にあった。この時代、外部からきた放牧経験のない漢人指導部によって、伝統的な遊牧生活は非科学的だとされ、モンゴル人が古くから飼育してきた在来種の家畜が処分され、羊毛用に品種改良された羊が増やされた。それが牧畜地域における人民公社の失敗した原因の一つだった。というのは、在来種の家畜の方がモンゴル草原の自然や気候に慣れているので生存力が高いからである。例えば、吹雪の時、在来種の羊は互いの腹の下に頭を入れて一か所に固まるので、どんな猛烈な吹雪の中でも平気である。羊飼いがその羊の群れの真ん中に入って座れば、どんなに寒くても持ちこたえることができる。一方、改良された品種だと、吹雪がくるとパニックを起こして走り回り、やがて体力を消耗しきってしまい、死に至ることが多い。

また、ベテランの遊牧民は天気予報を聞かなくても、太陽の輝きや雲の動き、風の勢いなどからその一週間の天気を予測することができる。長年の遊牧生活の中で培った知恵である。だから、吹雪が来そうな日に子どもに羊の放牧をまかせることはあり得ない。それに草原に生まれ育った子どもならよく知っていることだが、冬季は羊を必ず風上、つまり風が吹いてくる方向に放牧する。それは風が強まると羊の群れが向かい風にうたれて、自然に家に戻ってくるからである。

第 2 に、人民公社のずさんな経営の在り方や暴走が関係している。絵本『草原の幼い姉妹』の中で、幼い姉妹の会話にこのような場面がある。

**【p.17】** 歌をうたいおわると、ユイロンはロンメイにたずねました。「おねえちゃん、わたしたちヒツジをなん匹つれてきたの?」「384 匹よ」ロンメイが答えると、ユイロンはいたずらっぽくいいました。「ちがうわよ、全部で 684 匹よ。だって、かあさんヒツジ 300 匹のおなかに全部小ヒツジがいるでしょ!」

【p.18】それをきいたロンメイは笑いながら妹をほめました。「あら、ほんとにそうだわ。あとなん年かしたら、人民公社のヒツジは、空の白い雲にとどくほどふえるわ」

また、アニメ『草原英雄小姐妹』の主題歌「草原賛歌」の歌詞にも「夜空に輝く星の数は多いけれど、我らが人民公社の羊ほど多くない、空に漂う雲は白いけれど、我らが人民公社の羊ほど白くない」<sup>28</sup>とあるように、幼い姉妹は人民公社の羊が増えることを夢めている。これは実のところ、幼い姉妹の夢ではなく、人民公社が掲げていたスローガンなのである。

モンゴル草原は雨量が少なく、そこには半乾燥の土壌が広がっているため、家畜の数をむやみに増やすことは結果的に草原の環境破壊や生態系のバランスの崩れを招く。だから、そこに暮らしていた人々は、一定の数の家畜を移動しながら放牧するという生活スタイルを生み出し、牧草地を有効的に活用してきた。しかし、人民公社時代になると、漢人指導者によって遊牧生活は非科学的だとされ、定住型の放牧生活を余儀なくされ、家畜の数を増やすことが強制された。その結果、モンゴル人が懸念してきた草原の環境破壊や生態系のバランスの崩れが起き、その被害は今なお続いている。

第3に、子どもが小さな労働者として使われていた社会主義国家特有の教育の在り方が関係している。もちろん、子どもが大人たちの手伝いをするのは万国共通だが、人民公社時代は子どもたちにも労働の基準量であるノルマを与えていた。それは子どももれっきとした労働力として扱われていたことを意味する。ロンメイとユイロンの事件が発生した当初、果たされたノルマによって食糧が支給されていた。ということは、ノルマを果たせなかったら腹を空かすということになるので子どもたちも必死に働いた。

上海テレビ局総合チャンネル暑季特別番組「動画往事——あの時、私たちが夢中になったアニメ」<sup>29</sup>においてアニメ『草原英雄小姐妹』の監督の銭運達はこうに回想している。

アニメ『草原英雄小姐妹』の制作取材のために上海美術電影製片廠の専門チームが内モンゴルを訪れた。その時、龍梅と玉榮は百龍廟小学校<sup>30</sup>に通っていた。玉榮の片足は治療中で地面に接触することができず、あの子は松葉杖を使って歩いていた。にもかかわらずあの子は校舎建設を手伝い、片手で松葉杖を握り、片方の手で

煉瓦を運んでいた。それをみて私たちは心の底から感動した。私たちは用意していた脚本『雪原紅花』をやめ、写実主義に基づいたアニメを制作することを決めた。

この話からも分かるように、幼い姉妹が吹雪の中で人民公社の羊を放牧していたことには中国特有の「労働教育」が関係している。

中国では子どもが小学校に入学した時点から一人ひとりに「個人檔案」という個人ファイルが作られる。子どもが進学すると「個人檔案」もその子が進学した学校に送られ、やがて大学などを卒業し、社会人になると「個人檔案」が勤務する職場の人事部に送られ、そこで保管される仕組みである。その「個人檔案」には、その人の氏名、性別、生年月日、成績をはじめ校則違反時の罰則、家庭出身（出身身分）、政治面目（所属政党）などが細かく記録されている。その中にある成績表に日本という通知表のようなものがセットされていて、学年ごとの成績の後に担任からの評価が書かれている。そこには必ず労働に関する項目があり、「労働を愛する」「積極的に労働に参加する」「労働に消極的である」というように書かれる。この項目は成績より将来の仕事の採否に関係する。

今日の中国では、学校における労働とは校庭や教室の掃除、ガラス拭きなどを指すことが多くなっているが、私が学生だった 1990 年代までは校舎補修、運動場整備、ダム作り、国営牧場の補修、羊の毛刈りや家畜飼料用の草刈りなど本格的な労働が学校行事の一環として行われていた。

このように、幼い姉妹が猛烈な吹雪による凍傷で人体に障害を持ったことは結局、政治ゲームに伴う人災によるものであるといえる。しかし、幼い姉妹はその政治ゲームの中で大人の都合によって時の人としてマスコミに取り上げられ、『草原の幼い姉妹』に関する文房具、カレンダー、食器セットが今で言えばアイドルグッズのように中国全土で販売され、ビスケットの缶やドラム缶にまで姉妹の絵が描かれていて、その勢いは今なお続いている。

## 結びにかえて

この時代の中国の絵本には政治的・思想的メッセージが強く、または単純な勧善懲悪式の教訓ないし情操教育的なものが多かった。もちろんその大半は漢族社会を舞台にしたものである。その中において、絵本『草原の幼い姉妹』は、少数民族地域を舞台にただけではなく、主人公が少数民族出身の少女だったという点でも異彩を放つ

存在となった。本稿で絵本『草原の幼い姉妹』を題材にした理由はここにある。なにより、この絵本は実話に基づいて描かれたものであり、主人公の救済を巡って悲惨なドラマが起きたことが断片的に知られているが、本格的な研究は皆無である。

本稿では、まず北京外文出版社によって発行された絵本『草原の幼い姉妹』の多言語版を取り上げながら、これらの絵本は、中国の対外宣伝の一環として発行されたものであり、そこに幼い姉妹が猛烈な吹雪の中で生き残り、しかも人民公社の羊の群れを守ることができたのは、偉大な指導者である毛主席の教えをしっかりと守る「毛主席のりっぱな子ども」だったからであるという、政治的なメッセージが込められていることを明らかにした。その上で、そもそも『草原英雄小姐妹』というアニメや絵本はどのようにして生まれたのかということを、当時の内モンゴルを取り巻く政治情勢を踏まえながら解明した。

絵本は必ずしもほのぼのとした暖かな世界を描いたものばかりではない。絵本『草原の幼い姉妹』で言えば、幼い姉妹が吹雪の中で生き残ったのは、毛主席の教えのおかげであるというより、草原での放牧生活の中で培った忍耐力や、たまたま地理的好条件に恵まれたことによる。しかし、幼い姉妹は「大人の事情」に付き合わされ、社会主義に「活きた少女モデル」、さらに毛沢東思想の神秘性を謳う道具としてアイドル化され、時の人となった。

一方、その政治ゲームに巻き込まれたハスチョロは、鉄道員の王福臣の証言や当時の社会的・政治的な風潮の中で「吹雪の中で遭難していたロンメイをみつけたが、彼女を救済せず、羊の死体だけ背負って逃げた悪人」「羊どろぼう」「反動的な牧主」として吊るし上げられた。文化大革命が勃発すると、彼と彼の家族は、次々とその荒波に飲み込まれていった。文革時、ハスチョロにはさらに「修正主義国家モンゴル人民共和国への逃亡を図った」「修正主義国家のスパイ」「日本のスパイ」などの罪を着せられた。

ハスチョロによれば、1973 年 3 月に彼は自由の身となり、自分に科された罪がすべて冤罪だったことが認められた。1979 年 4 月頃、彼と息子のナランマンドラが一緒に書いた「誰が最初に（吹雪の中で遭難していた）草原英雄小姐妹のロンメイとユイロンをみつけ、救済したのか」という文章が『人民日報』の内部参考版に掲載された。その文章が当時の中国共産党中央秘書長兼中央宣伝部部長だった胡耀邦の目にとまり、胡耀邦の働きかけにより吹雪の中で遭難していたロンメイとユイロンを最初にみつけ、救済したのはハスチョロであるということが公式に認められ、1985 年 1 月

に名誉回復されたが、彼の妻は、文化大革命中に受けた暴力の後遺症により、1993年に他界したという。

近年、中国では市場経済の導入や一人っ子政策などの副作用として拝金主義・利己主義が蔓延し、それが社会問題になってきている。その対策の一環として、草原の若い姉妹ことロンメイとユイロンが頻繁にテレビに登場するようになり、二人が猛烈な吹雪の中で国家の財産である羊を守ったことが大々的に紹介されているが、若者からは「羊のために自分の命を危険にさらすとは考えられない」「羊の群れをおいて家に帰っていれば障害者にならなかったのに……」といったコメントが多くみられる。姉妹のかつての模範行為が今日の若者にとって「模範」になるのかどうかは不明であり、今後、引き続き注目したい。また、鉄道員の王福臣のその後について、本稿を執筆している段階から、事件が発生した地域のモンゴル人を中心に取材してきたが、確かな情報を得ることはできなかった。近年、ロンメイとユイロン、ハスチョロの息子のナランマンドラらは頻繁にテレビに登場しているが、彼らも王福臣のその後について口を閉ざしたままである。

---

<sup>1</sup> 脚本は何玉門と胡同倫、監督は銭運達と唐澄、人物設計は戴鉄郎である。全員が上海美術電影製片廠の主力メンバーであった。ロンメイとユイロンのキャラクターをデザインした戴鉄郎は「80後」（80年代生まれ）の子どもを虜にしたアニメ「黒猫警長」の監督である。

<sup>2</sup> 1970年11月に上海人民出版社が、このアニメに基づいて編集した『草原英雄小姐妹』というモノクロの絵本（縦9.9×横12.5cm）を刊行している。

<sup>3</sup> 行政区画変更に伴い1996年1月から包頭市の管轄下に入った。盟（アイムグ）は日本の市に相当し、旗（ホショー）は日本の郡に相当する。

<sup>4</sup> 国家の監視対象となっている思想犯のこと。その下放にあたっては、下放先の労働人民による日常的な監視のもと、「聖なる労働」を通して、思想を改め、生まれ変わることが求められる。

<sup>5</sup> チョルモン（ČOLMON）は内モンゴル人民出版社から発行されているモンゴル語の文学季刊誌であり、日本語で明けの明星「啓明」を意味する。

<sup>6</sup> 武田雅哉「龍梅（ロンメイ）と玉栄（ユイロン）の姉妹が読まれたもの——『草原英雄小姐妹』連環画の諸相」（『連環画研究』第1号、2012年3月）参照。

<sup>7</sup> 外文出版社公式ホームページ [www.flp.com.cn/main/](http://www.flp.com.cn/main/)（2018年6月2日閲覧）。

<sup>8</sup> ここでいう省は中国国務院に属する行政部門である。

<sup>9</sup> 麻子英「中国の出版事業と大学出版について」『大学出版』6号、大学出版部協会、1988年、4頁。

<sup>10</sup> 雷鋒（レイフォン）（1940-1962）は中国人民解放軍の模範兵とされる人物である。工作中、倒れた電柱が頭部を直撃し、僅か22歳で死亡した。生前、積極的に奉仕活動が続けていたということで1963年3月5日の『人民日報』に毛沢東による題字「向雷鋒同志学習」が掲載され、中国全国に「雷鋒同志に学ぼう」という運動が起き、今なお続いている。

<sup>11</sup> 2011年に人民美術出版社によって刊行された絵本『龍梅と玉栄』（徐恒進改編、劉大為絵画）などではこのあたりのくだりがない。

- <sup>12</sup> 楊海英『「知識青年」の1968年——中国の辺境と文化大革命』岩波書店、2018年、122頁。
- <sup>13</sup> 書記は中国共産党幹部の役職。支部書記は支部の中で最高の役職である。例えば、市では市長より市委員会のトップである市委員書記の役職の方が上である。書記は必ず共産党員でなければならない。
- <sup>14</sup> B. jirumtu 2002, *Ünen-u tegri Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy-a* pp.2-31 (邦題：ベ・ジルムト 2002『正義の味方「蒼天」』内モンゴル人民出版社)。
- <sup>15</sup> 楊海英『中国とモンゴルのはざままで——ウラーンフーの実らなかつた民族自決の夢』岩波書店、2013年、15頁。
- <sup>16</sup> 毛沢東文献資料研究会『毛沢東集』5 (竹内実監修)、北望社、1970、16-17頁
- <sup>17</sup> 楊海英 (2013)、前掲書、144頁。
- <sup>18</sup> 楊海英 (2013)、前掲書、149頁並びにUradyn E. Bulag 2002, *The Mongols at China's Edge History and the Politics of National Unity: Models and Moralities: The Parable of the Two "Heroic Little Sisters of the Grassland"* p.183.
- <sup>19</sup> 張思徳 (1915-1944) は毛沢東の親衛隊隊員だったが、抗日戦争期に大生産運動に積極的に参加し、農場の副隊長になった。洞穴式住居が崩れた際、仲間の二人を救って自分が犠牲になった人物である。1944年9月8日に開かれた追悼大会において毛沢東は「為人民服務」(人民のために尽くす) という題材で演説を行った。
- <sup>20</sup> 董存瑞 (1929-1948) は国民党軍のトーチカを爆破する際、爆薬を設置する場所がなかったので自ら爆薬を支えて爆破させた八路軍兵士である。河北省隆化県に建てられた記念碑に朱徳による題字「舍身為国、永垂不朽」(おのれを捨てて国のために尽くした彼の名は永遠に朽ちることはない) が刻まれている。
- <sup>21</sup> 黄継光 (1931-1952) は朝鮮戦争に参加した中国人民志願兵である。部隊が敵側の機関銃の集中攻撃を受けて身動きができない状況下で、手元に爆薬がなかった彼は、自らの身体で敵側の銃口を塞いで死んだ。志願兵指導部が、その功績を称えて「特等功」ならびに「特級英雄」と追悼記録した。
- <sup>22</sup> 綏遠事件とは、1936年に徳王が蒙古軍政府を樹立させた後、漢人軍閥の傅作義に奪われたモンゴル草原を取り戻すために日本軍の援助で綏遠地域に侵攻したことを指す。しかし、蒙古軍は編成されたばかりであり、訓練不足などから惜しくも敗れるが、翌年の1937年の盧溝橋事件後、蒙古軍は再び日本軍の支援で攻撃を開始し、同年10月に綏遠地域の政治と経済の中心地であった、今のフフホトや包頭、その周辺地域を占領し、漢人軍閥を黄河の対岸に撤退させた。
- <sup>23</sup> 1966年5月に上海文化出版社から刊行された『草原小妹妹』(内蒙古自治区芸術劇院京劇団演出本) には「羊どろぼう」が登場する。
- <sup>24</sup> B. jirumtu, 前掲書、42頁。
- <sup>25</sup> B. jirumtu, 前掲書、61頁。
- <sup>26</sup> B. jirumtu, 前掲書、40頁。
- <sup>27</sup> B. jirumtu, 前掲書、47-58頁。
- <sup>28</sup> 連画版絵本『草原英雄小妹妹』上海人民出版社、1970年。
- <sup>29</sup> 上海電視台新聞総合頻道暑期的特別節目「動画往事——那些年、我们追过的动画」、上海テレビ局公式 YouTube チャンネル、2015年09月10日公開。
- <sup>30</sup> 百靈廟小学校の間違い。